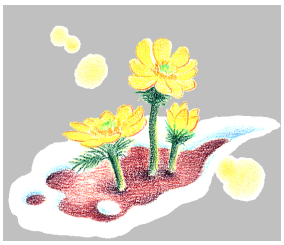
学校だより　令和３年６月号　NO．３



２０２１．５．２８

のびるほとっ子！

もっと　ほっと　ずっと

横浜市立保土ケ谷小学校

「身近な“遊び場”」

学校長　小川　克之

風薫る５月から、梅雨の６月を迎えます。子どもたちも新しい学年がスタートして２か月経ち、１年生は学校に慣れ、２～６年はよきお兄さん、お姉さんとして下学年を上手にリードしてくれています。

先日、「コロナ禍の子育て」という記事が新聞に掲載されていました。その記事は大学教授のコラムですが読んでみますと、コロナ禍といえどもずっと密室状態で子育てをするのは無理があるということ、そして子どもが育つのには、日常の遊びの充実こそが大事であるということが書かれていました。

確かに、自分自身の小学生時代を振り返ってみますと、下校してからすぐに外に出て元気に遊び、時には泣いたり、転んで擦り傷をつくって帰宅したり、外が暗くなってから帰宅し親に怒られたり、そのような思い出がよみがえってきます。やわらかいボールとプラスチック製のバット、そして遊び場さえあれば２、３人でも野球をしていました。
短縮授業等で、学校が早く終われば遠出をして、池でザリガニ釣りをしたり、林の中に入ってカブトムシやクワガタを採ったりしました。小学生の時の私にとって、最高の遊び場は、空き地や池や林だったかもしれません。

時代は変わり、現在は空き地や林や池など、遊び場自体は近くにありませんし、あったとしても「ボール遊び禁止」「釣り禁止」等の看板が掲げられ、“遊び場”に近寄ることすらできません。

しかし嘆いてばかりいるのではなく、少し見方を変えてみますと、家の近くの小さな公園や川、道路に沿った植え込みなど、普段見慣れている場所や風景であっても子どもたちはいろいろな発見をします。毎朝、校門に子どもたちを迎えているときも「校長先生、きれいな花が咲いていたよ。」と言って落ちている花びらを持ってきてくれたり、「こんな虫がいたよ。」「（寒い日は）氷が張っていたよ。」と言ってあまり見かけない虫や分厚い氷を見せてくれたりします。そのたびに、子どもたちの感性はすばらしいなと改めて感じます。（先日は、下校時にツツジの植え込みから、蛇が顔を出しているところを子どもたちが見つけました。）

大人は、レジャーランドやキャンプ場に行って特別な体験をさせなくてはと思いがちですが、身近な場所にも学ぶべき遊び場があるはずです。コロナ禍でなかなか遠出はできませんが、散歩をしたり、近くにある自然を再発見したりながら、子どもとの時間を共有し、コミュニケーションを大事にしていただければと思います。

今年度も、学校、学年で様々な行事を計画しています。しかしコロナの状況次第で場所や時程、活動内容等も変更することが考えられます。決まり次第、お知らせいたしますが、これからもご理解、ご協力をお願い申し上げます。